



駿大スポーツ
 駿河台大学
 経営企画室
 〒357-8565 埼玉県蕨市阿須698
 ☎ 042-972-1135
<https://www.surugadai.ac.jp>
 編集・ジャパンプリント(株)

**駿河台大学
 関東学連**

**駿スポ
 最高の挑戦!!**

5年連続選出



にしざわ こうすけ
西沢 晃佑
 ▶ 駿河台大学
 現代文化学部4年
 ▶ 長野日本大学高校
 出身
 ▶ 5,000m:
 14分20秒01
 ▶ 10,000m:
 29分23秒60
 ▶ ハーフマラソン:
 1時間03分58秒



**4年間で成長を
 徳本駅伝部監督**



西沢はハーフマラソン、ロードが得意な選手です。3年間彼には能力があると言いつつ続けてきましたが、メンタル的な弱さでなかなか結果が残せずにいました。4年生になり、その意味を理解し彼は人間的にも選手としても飛躍的に成長しました。箱根駅伝では彼の持ち味が生かせると思います。



「公園内コースに入っていく前から、今いる集団ならばいいタイムが出るなと思ってた。公園内に入ると余裕のある選手は一気にペースを上げるので、少しきつくなってきた時には、『まだいける、まだいける』と考えながら走っていた」という西沢。

「故障から復帰して本格的に練習を開始できたのが(2017年)12月頃。春頃には3回ほどハーフマラソンに出場したが、十分な練習は積めていなかった。その時々でできるパフォーマンスはできていたが…」
 そして予選会当日。西沢は1時間03分58秒、個人順位61位。序盤から後半まで集団の中につつも、粘り強く食らいついていくレースを展開。自己ベストをさらに更新し、見事関東学生連合チーム入りを決めた。

「昨年夏頃から大腿骨の疲労骨折を経験し、予選会を走ることができなかった。2年生の時も故障明けに無理に走っての出場だったので、気持ちの上では1年生の時以来、3年ぶりという気持ちで走った」
 2018年に入ってからは、3月に開催された第21回日本学生ハーフマラソン選手権大会において自己ベストを更新するなど、記録を着実に伸ばしながらの予選会参戦となった。

「自分は鈍感なところがあるので」笑
 「箱根駅伝に出る」ということへのプレッシャーはあまりない。むしろ『2区』を走るといふことに対してはプレッシャーを感じてしまう。でも、あまり気にしないようにしている。西沢が走る2区は「花の2区」とも呼ばれている。各校のエースが集う、序盤のハイライトとなる区間だ。
 「最初に2区を走ると言われた時は『任せてください』と答えた。しかしよく考えてみると、2区はエースが集う区間。これはやばいな」と笑った。
 2区は高低差40メートルの高さを駆け上がることとなる「権太坂」という難所が有名だ。また、ラスト3キロメートルにも厳しい登りがあり、選手たちを苦しめる。

その結果、関東学生連合チーム内での順位は6位。
 「春以降は距離を含め、今まで以上に練習を積むことができていた。自分の中でレベルアップした状態で予選会に臨めたことで自己ベストを出すことができたと思う」と笑顔で語った。

「坂は気持ち的には好きとは言えないが、苦手かと言われるのはそう言うわけではない。それ以上に(徳本)監督とお話しして、練習に30キロメートル走を数本入れていこうと提案があった。本戦で走る23・2キロメートルよりも長い距離を走ること、足を合わせていこう」と

関東学生連合では、他の大学の学生と標をつないでいくこととなる。大学内でのチームとはまた違った気持ちでのレースとなることも不安につながって来るのだが、「先日の会合で初めて顔を合わせた。最初はみんなおどおどしたところもあったが、インタビュアーの合間に会話することで徐々に打ち解けることができた。本戦に先駆けて事前合宿があるので、そこでより絆を深めていけたらいい」と語った。

「箱根駅伝は非常に高い。箱根駅伝に」出るだけでは、それだけで終わってしまう」と西沢は言う。
 「テレビに映りたい。テレビに映ってこそ、応援してくれる皆さんに『西沢頑張ってるな』と思ってもらえる。頑張っている姿が伝わるのだと思う」
 大会序盤の見せ場となるレース。西沢らしさを発揮したレースとなることに期待したい。

「自分は鈍感なところがあるので」笑
 「箱根駅伝に出る」ということへのプレッシャーはあまりない。むしろ『2区』を走るといふことに対してはプレッシャーを感じてしまう。でも、あまり気にしないようにしている。西沢が走る2区は「花の2区」とも呼ばれている。各校のエースが集う、序盤のハイライトとなる区間だ。
 「最初に2区を走ると言われた時は『任せてください』と答えた。しかしよく考えてみると、2区はエースが集う区間。これはやばいな」と笑った。
 2区は高低差40メートルの高さを駆け上がることとなる「権太坂」という難所が有名だ。また、ラスト3キロメートルにも厳しい登りがあり、選手たちを苦しめる。

その結果、関東学生連合チーム内での順位は6位。
 「春以降は距離を含め、今まで以上に練習を積むことができていた。自分の中でレベルアップした状態で予選会に臨めたことで自己ベストを出すことができたと思う」と笑顔で語った。

駿大スポーツ
 最新情報更新中!

信じ続ける
 最後の一秒まで

駅伝部HP
 Twitter

り、注目度が非常に高い。「箱根駅伝に」出るだけでは、それだけで終わってしまう」と西沢は言う。
 「テレビに映りたい。テレビに映ってこそ、応援してくれる皆さんに『西沢頑張ってるな』と思ってもらえる。頑張っている姿が伝わるのだと思う」
 大会序盤の見せ場となるレース。西沢らしさを発揮したレースとなることに期待したい。

青飯能の冬を奥むさし駅伝



ホームでの戦い 奥むさし駅伝



新春の奥武蔵路を盛り上げる駅伝大会がある。来たる1月27日(日)に開催される、奥むさし駅伝競走大会(奥むさし駅伝)だ。

沿道では多くの地域住民が声援を送り、各中継所付近に設置される接待所では温かい飲み物が振る舞われ、走り終えた選手の心と体を癒す。

今年で第17回目を迎える本大会は、毎年全国から200チーム以上が出場し、飯能地域を活気づける一大イベントとなっている。2018年に行われた第16回大会においては、アンカーを務めた西沢晃佑が3位の日本体大Aチームを3秒差で振り切り、前年度の3位から一つ順位を上げ、一般の部2位入賞を果たした。

2018年は記録会で自己ベストを更新する選手も多かった駿河台大学、流れに乗って最高の順位を獲得したい。

注目選手にインタビュー



よしざと しゅん 吉里 駿

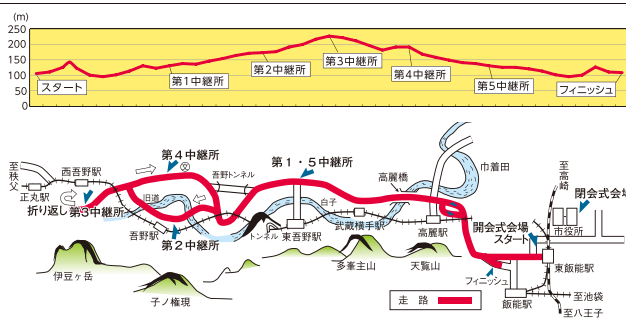
- ▷ 法学部 2年
- ▷ 大牟田高校出身
- ▷ 箱根駅伝予選会: 1時間4分42秒 (108位)

九州は福岡で育った吉里。駿河台大学駅伝部に入部して以来着実に力を付け、箱根駅伝予選会においてはハーフマラソンでの自己ベストを更新した。

「箱根駅伝予選会でのベスト更新を受けて、現在の調子は予選会ではベストのタイムで走れましたが、現在はなかなか調子上げることができていません。奥むさし駅伝までには自分の弱点であるフィジカルを強化し、今回のレースをきっかけに調子を変えていけたらと思っています。」

昨年は第52回織田幹雄記念国際陸上競技大会等の大きい大会に出場し、他大学との力の差を直に感じることで、練習のモチベーションの向上や、目指す目標の明確化につながりました。

「奥むさし駅伝への意気込みを」
前回の奥むさし駅伝では、納得のできる走りができませんでした。今年はチームに貢献できる走りができるよう、精一杯頑張ります。



奥むさし駅伝競走大会コース

あじさい街道 国道299号



しみず りょうが 清水 涼雅

- ▷ 経済経営学部 3年
- ▷ 前橋育英高校出身
- ▷ 箱根駅伝予選会: 1時間5分48秒 (193位)

大学入学当時は、駅伝はやらなないと心に決めていた清水。しかし、当時駿河台大学駅伝部に所属していた平賀喜裕選手(2016年度・現代文化学部卒)が箱根駅伝本戦で活躍する姿を目の当たりにし、自分の中で火がついての途中入部をしたという経歴の持ち主だ。

「再び駅伝をやりたいと思った当時、どのような気持ちが湧き上がってきたか」

箱根駅伝での平賀選手の走りをテレビで見た時、自分自身は本場に陸上をやりきったのかと疑問を抱きました。そこでもう一度陸上競技に打ち込んでみようという強い気持ちが湧き、入部を決定しました。

「再び駅伝をやりたいと思った当時、どのような気持ちが湧き上がってきたか」

「奥むさし駅伝への意気込みを」

今回で2回目の奥むさし駅伝です。現時点では1区ということでごチームのペースが走ると思いますが、その中に食らいついていけるように頑張ります！



いしやま だいき 石山 大輝

- ▷ 現代文化学部 2年
- ▷ 指宿市立 指宿商業高校出身
- ▷ 箱根駅伝予選会: 1時間8分44秒 (308位)

4年生の引退を経て、新体制として新たなスタートを切った駅伝部。新主将となった石山は、今後は自らが先頭となって駅伝部を引っ張っていく存在となる。

「新主将として駅伝部を引っ張っていく立場となったが、どんなチームにしていきたいか」

チームの目標である「箱根駅伝出場」を達成するため、箱根駅伝という舞台にふさわしいチームを作りたいです。チームの雰囲気は昨年以上に良くなってきたため、これから勝負だと思っています。

「奥むさし駅伝への意気込みを」

奥むさし駅伝は1年間のうちで唯一チームで出場する駅伝です。距離は短いものとなりますが、箱根駅伝をイメージしながら勝ちにこだわった走りを目指します。また、今回は1年生や留学生の選手も初めての参加となるため、楽しみながら襷をつないでいきたいと思っています。

チームでの箱根を目指して



と新主将の石山は言う。

練習中の集合、ミーティングでは選手たちの笑顔が溢れることも多い。「全員で一つの目標に向かって日々努力することができているチームだと思う」と、選手たちを見守るマネージャーの齋藤友美(現代文化学部・1年)は語る。

飯能の自然を生かし、名栗湖などの近隣のコースへ練習に行くことも少なくない。

「車の通りも少なく、ロードで長い距離を走って脚作りをするにはいい環境となっている」とは西沢の弁。

2018年の10月に行われた箱根駅伝予選会では出場したほとんどの選手がハーフマラソンでの自己ベストを更新。その後も積極的に参加している記録会においても自己ベストを更新する選手が続出した。

緑と水のまち、飯能で成長を続ける駿河台大学駅伝部は、遠くに見えた箱根への道を着実に駆け上がっている。

